

2. 文芸上の寛容

イギリスのベリー教授は『思想の自由史』ⁱを書いたが、その第四章にこんな言葉がある。「新派のローマ教会に対する叛逆の理智的な根拠は、個人の判断の権利であって、それは宗教の自由の根本である。しかしこれら改革者たちは彼ら自身のそうした主張に対してのみそうであって、一旦彼らが自分たちの信条を実現してしまうや、またその主張を取りやめてしまった」と。こうした情況はなにも宗教だけに限らない。文芸上で新派が起こるたびに、必ず——われこそは前の革命成就の英雄であるとばかり、批評上の多くの大道理を持ち出して、新しい潮流の動きを封じようとするたぐいの人たちが出る。われわれは文芸の歴史にこうした情況が反復出現するのを見ると、笑いを禁じ得ず、実際創作の天才と同じく聡明な批評家も稀有だなあと思うのである。自己の判断の権利を主張しながら他人における自我を承認しないことが、すべての不寛容の原因である。文学者は自分の流派を尊重するあまり、それが唯一の「道」だと思ってしまう、他派を蔑視して異端とするに至る。それは怪しむに足りないことだが、文芸の本質とははるかにかけ離れている。

文芸は自己表現を主体とし、他人に感染させることをその作用とする。個人のものであってしかもまた人類のものである。したがって文芸の条件は自己表現であって、その他の思想や技術上の流派はすべて二の次で、研究する人間の便宜上の分類で、文芸の本質において優劣を判定するための基準ではない。各人の個性がそれぞれに違う以上、（究極的には人間性という共通点が依然あるのであるが）表現された文芸は当然同じでない。いまもしも批評上の大道理を持ち出して統一を強要するなら、仮にこの不可能な事柄が果たして実現できたとしても、そんな文芸作品はすでにその唯一の条件を失っていて、実際には文芸となり得ない。文芸の生命は自由であって平等ではなく、分離であって合併ではないから、寛容こそが文芸の発展の必要条件なのである。

けれども寛容は決して忍受ではない。権威を濫用して他人の自由な発展を阻止しないのが寛容であり、権威の言うがままに自己の自由な発展を阻止し反抗しないのが忍受である。まっとうな規則は、自分が自由な発展を求める場合、圧迫する勢力に対しては忍受の態度を採るべきではなく、自分がすでに勢力を占めたのち、他人の自由な発展に対しては寛容の態度を採らなくてはならないということである。聡明な批評家は自分が既成の勢力の一分子たることは構わぬが、同時に新興の潮流に対して理解と承認を与えなければならない。彼の批評は印象的な鑑賞であって法理による判決ではなく、詩人の批評であって学者のそれではない。文学はむしろ科学的な研究となりうる。だがそれはただ已往の事実の総合と分析であって、未来の無限に発展する模範にはなり得ない。文芸における激変は文芸の法律を破壊することではなく、条文を増やすことである。たとえば無韻詩の提唱は、「詩には必ず韻がなければならない」という法令を破壊したように見えるが、実は旧時の狭い範囲を改めて、それを拡大し、「詩には韻がなくてもよい」としただけのことである。生命の顫動を表す文学にはもちろん不変の規律などない。歴代の文芸はそれ自身の時代にあっては一代の成果であるが、全体からは一つの過程に過ぎない。文芸がどの程度になれば大成したことになるのかということ、文化がどうなれば頂上を極めたのかというようなも

ので、いずれも回答不可能なことである。なぜなら進化には止まるところがないからである。多くの人は全体の一過程を永久的な完成と見誤っているから、そういうつまらぬ争いが起こるのであって、実際は自分で面倒を作っているに過ぎない。どうしてこんなむだな精力をまっとうな仕事に当て、自分の旅程を行かないのだろう。

最近一群の保守的な新学者が、よく新文学者の「個性を発揮し、創造に重きをおこう」という言葉を盾にとって、新文学者たちは「文言を書く者に対して仇敵視す」べきではないとする。その意は、わたしの言う寛容といささか似ているように見えるが、実際にはまったく関係がない。寛容というのは過去の文芸についてはもちろんそれ相当の承認と尊重を持っている。だがその寛容は施す対象がない。というのはそうした文芸はすでに過去のものであり、現在の勢力が干渉できるものではないから、もう寛容は問題にならないのである。いわゆる寛容とはつまり既成勢力の新興の流派に対する態度をいうのである。ちょうど壮年の人間が青年の活動するがままに任せるように。その重要な根拠は、活動、変化は生命の本質であるということにある。流派がどんなに違おうと、それが個性を発展させ創造に重きをおくことは、ともに人生の文学の方向であり、現象の上ではあるいは反抗であっても、全体からすればほんとうは継続である。だから寛容で、その自由な発育に任すべきなのである。もし「文言を作つ」たり、擬古したりする人々（擬古典派と擬伝奇派とを問わず）が、新興の、もっと進んだ流派でないのならば、もちろん寛容の列には入らない。——こういう言い方にはあるいは少し語弊があるかもしれない。もちろん「仇敵視」してよいと言っているのではなく、ひと様の寛容は必要でないと言っているに過ぎない。彼ら過去の権威を遵守する人たちは、背後に大多数の人々の擁護を受けていられるのだから、誰が彼らを迫害などしようか。ほんとうを言うと中国の現在の文芸界では旧派に寛容があることなどまだ問題にもならず、新派がもう勢力として確立したのかどうか、旧派の圧迫を忍受すべきなのかどうか、おろそかにできない問題なのである。

最後にもう一言付けたりの説明を加える。旧派が不寛容の列にある理由は、彼らが個性の発展という条件に合わないからである。権威に服従するのはまさしく個性を没却してしまっていることであり、その上なんの発展があろう。新古典派——イギリス十八世紀のではない——と新伝奇派ⁱⁱは、融合してはいるが模倣ではない。だからまだ個性があるのだ。現代の古文派に至っては、擬古という通性しかない。

※初出：1922年2月5日『晨报副刊』

ⁱ 『思想の自由史』 J. B. Bury; A History of freedom of Thought, Williams and Norgate, Home University Library. London 1913. ch. IV Prospect of Deliverance, p. 81.

ⁱⁱ 新古典派・新伝奇派 具体的にどのような作家作品を指すのか未詳。